貴校名：	ご担当者名：	連絡先：

動物看護師養成教育を高位平準化するための取組です。各校が実際にコアカリ教育を遂行した上で気がつきました改善提案を徴集させていただき、大学協会とのすり合わせのうえ、統一認定機構において認定動物看護師養成コアカリキュラム第2段として整備してまいります。各校にはコアカリ各教科をご担当いただいた教員・講師の方々にご参加いただき本資料に取り組んでいただくことと思いますが、提出の際はご意見を取りまとめて、各校1シートの提出でお願いいたします。

◆検証と改善についてのお願い

1）コアカリ表の「見直し資料」の改善提案事項に記入していただくきますが、必ず理由を書き添えてください。

例：

①時間数増減について・・・〇〇教科中であつかっている〇〇については、解説時間が足りないので増やしたほうが理解度があがる

②授業内容の重複について・・・〇〇については感染症学と公衆衛生学と両方で授業しているので、公衆衛生学中で学習することとし、その分感染症学は〇〇時間数の減少が望ましい

③教授するのに困難である・・・〇〇学は、現状発行されている教科書に適したものが無く、資料を揃えて学生の理解度を挙げることが困難なため、授業が困難である。〇〇教科については教員向けのセミナーで修得した後に授業を担当したほうがよい

2）各教科の時間数の改善提案は必要ですが、”全体で2400時間”は崩さない方向で進む予定です。

3）改善案を提案していただく際、各校の都合による「できないから」「担当教員がいないから」ではなく、専門学校教育の高位平準化を目的とした教育を目指す内容として評価できるものをご提案ください。

4）統一認定機構が承認するカリキュラム表は、統一認定試験範囲のキーワードとなります。

そのため、大学との擦りあわせが必要となりますが、大学と専門学校が同じ内容にする、という意味ではなく　両方に共通なコアな部分が含まれていることになります。

大学は、統一認定機構承認カリキュラムの上にプラスαが加わることが考えられます（4年間教育で大学が目指す教育内容）

5）2400時間（2年間及び3年間）は崩さずに、教科の時間配分のみを変更する可能性があります。

コアカリ実施時間1920時間、各校の独自性をアピールできる時間数480時間の割合を変更する案も可能です。

専門学校の強みと考える実習時間の多さ（1920時間中42%）の検討も含めてお願いします。

6)提出期限	2016年4月22日（金曜日）

コアカリキュラム　見直し　資料

記入項目 ※任意　　☆　随意、欄は広げて記入ください

分野		所属教科（授業科目）例	参考時間数	改善時間数	理想学修学年	含まれるもの（内容）例	キーワード（履修項目）	改善提案事項	理由
専門基礎分野	動物の体の構造と機能を理解する	動物形態機能学	150			概論	細胞の構造（染色体）、細胞組織、遺伝様式、体液と尿、生体恒常性		
						比較解剖学	皮膚、筋・骨格、脳と神経、感覚器、循環器、呼吸器、消化器、内分泌とホルモン、生殖器、歯		
						血液学	血液成分と働き		
						免疫学	免疫機構、免疫細胞、輸血と移植の免疫、動物種による免疫		
						形態機能	臓器（卵巣、子宮、精巣含む）の形と機能		
	疾病の成り立ちと回復の促進に寄与することを学ぶ	動物病理学	30			病理学概論	発病のメカニズム、変性、化生、委縮、肥大、過形成、浮腫、炎症、腫瘍		
		動物疾病看護学	150			概論	バイタルサイン、病的変化		
						内科疾患	主要疾患の機序、症状、検査法、治療法		
						外科疾患	主要疾患の機序、症状、検査法、治療法		
						皮膚疾患	主要疾患の機序、症状、検査法、治療法		
						眼科疾患	主要疾患の機序、症状、検査法、治療法		
						歯科疾患	主要疾患の機序、症状、検査法、治療法		
		動物薬理学	30			薬理学	作用機序、薬物耐性、薬物アレルギー、有害作用、中毒、プラセボ効果		
						薬物学	主要な薬剤の特性、主な化学式		
		動物感染症学	60			総論	寄生とは		
						内部寄生虫	主な種類（原虫、吸虫、条虫、線虫）と感染経路		
						外部寄生虫	主な種類（節足動物）と感染経路		
						微生物	細菌の構造と分類、細菌の増殖と耐性、ウィルスの構造と分類、真菌の構造と分類		
	健康管理と維持に必要な技術と概念を学ぶ	病原体・衛生管理	30			概論	病原体の種類、感染の成り立ち、治療法		
						ワクチン	ワクチン、予防		
		動物健康管理	15			飼育管理、日常手入れ	適正飼育、食べてはいけないもの、事故防止		
		動物栄養学 ※15hr/単位換算	75			栄養素	6大栄養素、犬猫の基礎栄養、BCS評価、カロリー計算、適切なフードの知識、		
						特別療法食	疾病と栄養管理		
						ペットフード市場	受容と嗜好性、ペットフードの取り扱い		
	動物医療業界の関連法規を知る	動物医療関連法規	30			獣医師法			
						狂犬病予防法			
						動物愛護及び管理に関する法律			
						鳥獣保護法			
						薬物関連法規	薬（向神経薬、麻薬、毒劇物）の保管、薬事法など		
						家畜伝染病予防法			
						その他動物関連法規	補助犬法、動物取扱業者		
						その他法規	個人情報保護、労働基準、労働安全衛生、育児介護、健康保健		
	ヒトと動物の調和に関わることを学ぶ	公衆衛生学	30			概論	公衆衛生と獣医療の関わり、公衆衛生と疾病との関わり、公衆衛生と環境との関わり		
						人獣共通感染症	主なズーノーシス		
						滅菌・消毒	院内感染防御、滅菌法、消毒薬の特徴		
						動物防疫学	感染症とその対策		
		動物繁殖学 ※15hr/単位換算	15			概論	性周期、繁殖、交配		
						分娩・新生子	妊娠、胎子発達、分娩、帝王切開、新生児、産褥期の異常		
						遺伝学	遺伝性疾患、計画交配		
		動物人間関係学	30			HAB、AAA、AAT、AAE	HAB、AAA、AAT、AAEなどの概論		
		動物行動学	60			概論	動物の家畜化		
						犬・ネコ学	犬と猫の発生、生態、種類の特徴		
						行動の意義と機構	行動発達過程、行動の周期性(内分泌、ホルモン)、生得的行動、習得的行動		
						しつけ・トレーニング	学習理論、動機づけ、社会化、排泄、カーミングシグナル、パピークラス		
						問題行動	排泄問題、攻撃性、恐怖・不安		
		動物福祉論	30			獣医療倫理	生命倫理、インフォームドコンセント、安楽死		
						動物福祉	5つの自由		
		飼養管理学 （エキゾチックアニマル含む）	30			ｳｻｷﾞ、小鳥、ﾊﾑｽﾀｰ、ﾓﾙﾓｯﾄ、ﾌｪﾚｯﾄなど	生態、飼育管理、取り扱い		
			30			実験動物	主な種類、概論、倫理、3R		
						産業動物	主な種類、家畜歴史、家畜の主な疾病予防学、家畜飼養学、農場HACCP		
						野生動物	概論、野生動物の生態と生息環境、捕獲、絶滅危惧種の保全・保護管理、外来生物		
						展示動物	概論、社会的な役割		
専門分野	動物看護に活かす	動物看護学 ※15hr/単位換算	15			看護学概論	看護倫理、概念		
						動物の看護	看護過程、POS		
						終末期患者動物の看護	グリーフケア、ペットロス、QOL、死後の取り扱い		
		臨床動物看護学	90			概論	経過・症状に応じた看護		
						内科疾患の看護	主な疾患に応じた看護、疾病予防		
						外科疾患の看護	主な疾患に応じた看護、疾病予防		
						皮膚疾患の看護	主な疾患に応じた看護、疾病予防		
						眼科疾患の看護	主な疾患に応じた看護、疾病予防		
						歯科疾患の看護	主な疾患に応じた看護、疾病予防		
		動物入院管理	30			ケア、看護計画	病床管理、観察、排泄、食事、メンタルケア		
						看護記録	アセスメント		
						治療・処置別による看護	疼痛管理、ICU、伝染病		
		幼齢動物・老齢動物管	30			哺育	排泄援助、		
						在宅・訪問管理	加齢よる身体的特徴、認知障害、褥瘡予防、徘徊改善、夜鳴き改善		
	基礎で習得した知識の応用	動物臨床検査学	30			検体検査	便、尿、血液、細胞など		
						生体検査	ﾚﾝﾄｹﾞﾝ（放射線の基本性質、防護、発生装置の仕組みと管理）、ECG、超音波、内視鏡・MRI・CTの特徴		
		救急救命対応 ※15hr/単位換算	15			エマージェンシーとは	トリアージ、生命徴候、救命法（CPR）		
						救急救命疾患	中毒、誤飲誤食、外傷、熱中症、溺水、感電		
		ｸﾗｲｱﾝﾄｴﾃﾞｭｰｼｮﾝ	30			疾病予防、避妊去勢、健康管理、衛生管理指導	飼い主指導、啓蒙		
		院内コミュニケーション ※演習含む	75			受付、クライアントコミュニケーション	カルテ作成、退院手続、薬の説明、会計業務、問診、電話対応		
						スタッフコミュニケーション	チーム医療での役割		
	基礎で習得した知識の実践 ※810時間	動物飼育実習Ⅰ	45			ｺﾝﾊﾟﾆｵﾝｱﾆﾏﾙの適切な飼育法	健康動物の適切な飼育法、ハンドリング		
						ドッグトレーニング	ドッグトレーニング法		
		動物飼育実習Ⅱ	90			動物飼育に関する技術の実践と応用			
		動物看護実習Ⅰ	90			診療補助、輸液管理、主な処置法、シリンジの扱い	体重測定、体温測定、保定、バイタルサイン測定、創傷管理、包帯法、電法、吸引		
						衛生管理、調剤	院内清掃、医療廃棄物処理、各種投薬法、薬の計算と調剤		
						グルーミング	グルーミング（爪切り、肛門嚢絞り、耳掃除）、被毛の手入れ		
		動物看護実習Ⅱ	135			看護技術の実践と応用			
		動物臨床検査学実習Ⅰ	90			検体処理	処理法、保管		
						検査機器の取り扱い	顕微鏡、各種検査機器		
						血液検査・尿検査・便検査・細胞診・微生物学的検	免疫学的検査、顕微鏡学的検査、標本作製、正常と異常の違い、クロスマッチ、培養		
						ﾚﾝﾄｹﾞﾝ、超音波、ECGなど	防護、取り扱い、準備		
		動物臨床検査学実習Ⅱ	135			検査技術の実践と応用			
		外科動物看護実習Ⅰ	45			手術関連業務	手術準備、術着・手袋の着用、糸の種類、器具の種類と目的、手術助手		
						術前術後の看護	前処置、術野の準備、術創保護、リハビリテーション、疼痛管理		
						麻酔・鎮痛	麻酔薬、鎮痛薬の準備、動物の看護		
						麻酔モニタリング	装置の扱いと装着、評価		
		外科動物看護実習Ⅱ	45			外科に関する技術の実践と応用			
		総合臨床実習	135			動物病院実習			

＜ご意見・ご提案＞